

イザヤ書 25章 感謝と勝利

世界のさばきのまっただ中で、イザヤは突然、感謝と勝利の歌を歌う。彼は、さばきがどれほど徹底的であっても、それは神の全知全能のはかりごとの一部であり、最後の日に、残された民にとっては、感謝と勝利の原因になることを知っていた。第一部あるいは第二部と密接に結びつきながら、より原則的に問題が取り上げられ、黙示的また終末的な色彩が濃くなっている。

- 1節 主よ。あなたは私の神。
私はあなたをあがめ、
あなたの御名をほめたたえます。
あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、
まことに、忠実に成し遂げられました。

יְהוָה אֱלֹהֵי אֲתָהּ אֲרוֹמְמוּךְ אֹרְתָהּ שִׁמְךָ כִּי ^{WTT} Isaiah 25:1

עֲשִׂיתָ פְּלֵא עֲצוֹת מִרְחוֹק אֱמוּנָה אֱמוֹן:

前半は詩篇にしばしば見られる表現である(詩 31 : 14、118 : 28、145 : 1)。それは出エジプトの時の賛美と勝利の歌に出発点を置いている(出 15 : 2)。 遠い昔からの不思議なご計画 。出エジプトから、更に昔のアブラハムの契約以来の神の恵みのみわざへと、聴衆の心を導いてゆく(出 15 : 11、詩 77 : 14)。 不思議な (△ベレ) 9 : 6.アブラハム、モーセから、イザヤを経て、「不思議」と呼ばれる「インマヌエル」が来られるまで、神のはかりごとは、すべて まこと であり 忠実 であり、一点も欠けるところはない。たとい、さばきのさなかにおいて、人間的な目には絶望と悲慘以外の何ものでもないように見えるとしても、そうなのである。イザヤは、24章に描いたような世界滅亡図と、25 : 2 以下に再び宣べる荒廃図の間に、信仰者がどのように霊的な目を開かれてそれを見るべきかを示す。

- 2節 あなたは町を石くれの山とし、
城壁のある都を廢墟にされたので、
他国人の宮殿は町からうせ、
もう、永久に建てられることはありません。

כִּי שִׁמֹּתָ מְעִיר לְגֹל קְרִיָה בְּצוּרָה לְמִפְלָה ^{WTT} Isaiah 25:2

אֲרָמוֹן זָרִים מְעִיר לְעוֹלָם לֹא יִבְנָה:

ここでは、特別の国とか町の荒廃の状態を考える必要はない。それは第二部の中で宣べられた

イザヤ書 25 章

からである。町 都 宮殿 は、単数であるが、不特定多数の町々や都を考えることができる。宮殿 (⌘アルモン) 23 : 13 注解。

3 節 それで、力強い民も、あなたをほめたたえ、
横暴な国々の都も、あなたを恐れます。

עַל־כֵּן יִכְבְּדוּךָ עַם־עַז קְרִית גּוֹיִם עָרִיצִים^{WTT} Isaiah 25:3

יִרְאוּךָ:

世界のさばきの結果は、強国や横暴な民も主を認め、主をほめたたえるようになる。

4 節 あなたは弱っている者のとりで、
貧しい者の悩みのときのとりで、
あらしのときの避け所、
暑さを避ける陰となられたからです。
横暴な者たちの息は、
壁に吹きつけるあらしのようだからです。

כִּי־הָיִיתָ מְעוֹז לְדָל מְעוֹז לְאֲבִיוֹן בְּצַר־לוֹ^{WTT} Isaiah 25:4

מִחֶסֶה מִזֶּרֶם צֶל מִחֶרֶב כִּי רֵיחַ עָרִיצִים כָּזֶרֶם קִיר:

3 節の理由が説明される。それは、さばきのさなかに、神が あなたは弱っている者のとりで、
貧しい者の悩みのときのとりで となられたからである。あらしのときの避け所、暑さを避ける陰 は、4 : 6 とほぼ同じ表現。神が貧しい者たちの保護者として 壁 になってくださるので、横暴な者たちが 息 を あらしのよう に吹きかけても、びくともせず、それは逆に吹きつけたほうに逆流する。

5 節 砂漠のひでりのように、
あなたは他国人の騒ぎを押さえ、
濃い雲の陰になってしずまる暑さのように、
横暴な者たちの歌はしずめられます。

כְּחֶרֶב בְּצִיּוֹן שְׂאוֹן זָרִים תִּכְנִיעַ חֶרֶב בְּצֶל^{WTT} Isaiah 25:5

עַב זְמִיר עָרִיצִים יַעֲנֶה: פ

イザヤが詩人であることがよく表れている個所。 18 : 4.

6 節 万軍の主はこの山の上で万民のために、
あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、
髓の多いあぶらみと
よくこされたぶどう酒の宴会を催される。

וְעָשָׂה יְהוָה צְבָאוֹת לְכָל־הָעַמִּים בְּהַר הַזֶּה ^{WTT} Isaiah 25:6

מִשְׁתֵּה שְׂמֵנִים מִשְׁתֵּה שְׂמֵרִים מִמְחִים שְׂמֵרִים

מִזְקִים:

6-9 節では、終末の日に神がシオンの山で準備される大いなる宴会の様を描く。24:7-9 に描写されたように、地上の酒宴は、さばきの日にすべて廃止される。しかし、神は、禁酒同盟や断食クラブの会長ではない。最上の肉とぶどう酒を用いて最高級の祝宴を開き、そこに 万民 を招待される。

7 節 この山の上で、
万民の上をおおっている顔おおいと、
万国の上にかぶさっているおおいを取り除き、

וּבִלְעַ בְּהַר הַזֶּה פְּנֵי־הַלּוֹט הַלּוֹט ^{WTT} Isaiah 25:7

עַל־כָּל־הָעַמִּים וְהַמַּסְכָּה הַנְּסוּכָה עַל־כָּל־הַגּוֹיִם:

最高級の霊のごちそうは、4つの要素から成る。顔おおいが除かれること、死が滅ぼされること、涙がぬぐわれること、そしりが除かれることである。

顔おおい は旧約聖書中ここにしか用いられない。また、その由来する動詞も 3 回しか用いられない(サム 21:9、列 19:13、イザ 25:7)。また おおい の由来する動詞 かぶさっている も、ここだけにしか用いられない。それゆえ、具体的にどのような おおい を考えていたかは不明である(3:19、23、創 24:65、38:14,19)。イザヤは、モーセがシナイ山のふもとで民と話す時、顔にかけていた「おおい」を考えていたと思われるが、そのことばも 3 回しか用いられない特別のことばである(出 34:33-35)。この事実の解釈は、パウロによって見事になされている(コリ 3:7-18)。注意すべきことは、顔おおいを掛けていたのは、民ではなく、モーセであったことである。それゆえ、コリント 3:7-18 の文の構成を調べて、この 7 節を見ると、イザヤが驚くべき新約思想を先取りしていたことがわかる。まずイザヤは、イスラエルという地上の民を超え、万民 を考えていた。第二に、万民の中で、顔おおいが除かれる者と、そうでない者とがある。それは神 モーセ イスラエルの関係において、神 おおいを取り除か

れた民 さばきの下に置かれたままの民、を考えていることである。モーセが神の御前でおおいを取ったように、新しい民も神の御前でおおいを取る。しかし、さばきの下に置かれたままの民の前では、おおいを掛けていなければならない。それは、彼らの思いが鈍くなっているからである(コリ 3 : 7,13,14)。更に、顔おおいを 取り除く 方は神ご自身である。取り除く と訳された動詞は、単に外すという意味ではなく、急激に引き裂くという意味である。それはまた、混乱を招くという意味にもなる。イザヤはこの動詞をしばしば用いる(3 : 12、9 : 16、19 : 3、28 : 4,7、49 : 19)。

イザヤがここで「心をかたくなにするメッセージ」(6 : 9、10)を考えていたことは当然である。しかし、3、40 年の預言者生活の後、彼は、このメッセージの適用が、単なるイスラエルのみでなく、普遍的なものであることを知った。また、それは終末的な視点においてのみ解釈すべきであることを知った。それは、神の側から人の心のおおいを破られるという形において、救いのメッセージになることを知ったのである。そして、そこでは、モーセとシナイ律法も超克される。

8 節 永久に死を滅ぼされる。

神である主はすべての顔から涙をぬぐい、
ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる。
主が語られたのだ。

בְּלֶעַת הַמּוֹת לְנֶצַח וּמַחָה אֶדְנִי יְהוָה הַמַּעַה ^{WTT} Isaiah 25:8

מֵעַל כָּל-פָּנִים וְחָרַפַּת עַמּוֹ יִסִּיר מֵעַל כָּל-הָאָרֶץ כִּי יְהוָה

דְּבַר: פ

終末の日に、万軍の主が用意される第二のごちそうは、 死を滅ぼす こと。旧約において、死 に対する明確な解決を教えている箇所は少ない。それゆえ、この 8 節と 26 : 19 は重要な箇所である。

【死について】

死 マーウェス、死者の行くべき場所 シェオールの語意については明らかではない。人間は死ねば「暗やみのように真暗な地」(ヨブ 10 : 22)に行き、そこには、うじや虫けらが満ちていると言われている(イザ 14 : 11)。それは「忘却の地」(詩 88 : 12)であり、「沈黙」そのものである(詩 94 : 17、115 : 17)。

問題は、それが一定の場所として考えられていたか、単なる表現であるかということと、「生」と「死」の間に明確な一線が引かれていたかどうかということである。死者が「弱くされ」た者(イザ 14 : 10)と呼ばれ、「死者の霊」(ヨブ 26 : 5、イザ 14 : 9)、「死人の霊」(イザ 29 :

4) と呼ばれるのを見ると、死んだら完全消滅するというのではなく、何かの存在として考えられていたことがわかる。人が死んだら、全体的に何か希薄な「陰」のような存在になると考えられた。「死」は、光の当てられない状態であり、定義を下そうとしても、人間の能力、知力、経験をもってしては説明の光を加えようもない事態なのである。

ヘブル人にとっては、一人の人が存在するのみであって、分析的にそれを考えることはしない。それゆえ、「死」において、身体的要素は滅びるが、靈魂は残るという考え方は、旧約全体の証言と相容れない。旧約における「死」の考え方は、新約における「死」と「死に対する勝利」の意味への背景を提供すると共に、死を、個人の枠の中でのみ考え、更にそれを身体的、精神的、靈的と分析的に考えるやり方を拒否し、創造の秩序と救いの秩序の中での「関係」の枠において考察するように導くのである。

死は、人間を四つのものとかかわらせる。

自己とのかかわり

死はすべての人間にふりかかってくる(ヨブ 21:32、33、詩 49:12,20、伝 12:7)。死は「世のすべての人の行く道」である(ヨシ 23:14、列 2:2)。「死」がすべての人に臨むのであれば、「生」は一回限りのものであり、そこから、「今」と「自分の日」の意義が知られる(詩 90:12)。ヒゼキヤの祈りにおいても、このことが自覚されている(イザ 38:10-20)。

民とのかかわり

旧約は「息絶えて死に、自分の民に加えられた」(創 25:8、17、35:29、49:29、33、民 20:26、27:13、31:2、申 32:50)などの表現によって、死が社会共同体の問題であり、民族的な枠の中で考えられることを示している。墓はその点で重要な意味を持つ(イザヤ 14:19,20、22:16-18、53:9)。

被造世界とのかかわり

創世記 1-3 章は、人間が創造の冠として造られ、被造世界を治めるべきものとして存在したこと、しかし神への不従順によって「死ぬべき存在」になっただけでなく、この世界も呪いの下におかれたことを証言している。イザヤもこの考えを受け継いでおり、シオンにおける神の民の救いは、新しい世界の再創造と密接に結びついている。

神とのかかわり

「死」とは、神とのかかわりの根本的な断絶を意味するものである。「死」を契機として、自己の生の意味に今一度目覚めさせられたヒゼキヤは、更に、神とのかかわりを考察するように導かれている(イザ 38:10 - 20)。

第三と第四の神の恵みは、涙をぬぐい そしりを・・・除く ことである。ここでイザヤは、抽象的な罪の概念と罪の赦しを考えてはいない。私たちが罪人であり罪のさばきを受けてい

ということ、具体的に、涙することの多い人生を歩んでいるということである。また、罪の赦しは、机上の教義を覚えることでなく、具体的に涙をぬぐわれ、嘆きが喜びに変えられることである(イザ 30 : 19、35 : 10、51 : 11、65 : 19)。ご自分への民へのそしりは、しばしば、ユダヤ人へのそしりと考えられているが、ここでは、神の一方的な恩寵による「万民」の救いが宣べられているのであって、ユダヤ人に限定されない。神の民として受けるそしりである(イザ 51 : 7、詩篇 69 : 9、89 : 50、51)。

9 節 その日、人は言う。

「見よ。この方こそ、
私たちが救いを待ち望んだ私たちの神。
この方こそ、私たちが待ち望んだ主。
その御救いを楽しみ喜ぼう。」

וַיֹּאמֶר בַּיּוֹם הַהוּא הִנֵּה אֱלֹהֵינוּ יְהוָה קִיְנוּ לָנוּ ^{WTT} Isaiah 25:9

וַיִּשְׁמְעֵנוּ יְהוָה קִיְנוּ לָנוּ נְגִילָה וְנִשְׂמָחָה בִּישׁוּעָתוֹ:

その日 2 : 2、4 : 2、12 : 1。人は言う は単数であるが、6-8 節における神の民の代表者として賛美の歌を歌う。

10 節 主の御手がこの山にとどまるとき、
わらが肥だめの水の中で踏みつけられるように、
モアブはその所で踏みつけられる。

כִּי־תִנּוּחַ יַד־יְהוָה בְּהַר הַזֶּה וְנִדְּוַשׁ מוֹאָב ^{WTT} Isaiah 25:10

תַּחֲתֵיוּ כְּהַדּוּשׁ מִתְּבֵן (בְּמִי) [בְּמִן] מִדְּמִנָּה:

11 節 泳ぐ者が泳ごうとして手を伸ばすように、
モアブはその中で手を伸ばすが、
その手を伸ばしてみるごとに、
主はその高ぶりを低くされる。

וּפְרֵשׁ יָדָיו בְּקִרְבּוֹ כְּאֲשֶׁר יִפְרֵשׁ הַשָּׁחַה ^{WTT} Isaiah 25:11

לְשָׁחֹת וְהִשְׁפִּיל גְּאוֹתוֹ עִם אַרְבּוֹת יָדָיו:

イザヤ書 25 章

12 節 主はあなたの城壁のそそり立つ要塞を
引き倒して、低くし、
地に投げつけて、ちりにされる。

וּמִבְצָר מְשֻׁנָּב חוֹמֹתָיִךְ הַשָּׁחַ הַשְּׁפִיל הַגִּיעַ ^{WTT} Isaiah 25:12

לְאֶרֶץ עֵד-עֵפֶר: ס

4-9 節のメッセージと対照的に、モアブの滅亡(15-16 章)が例として宣べられる。滅ぼされるのは、「巧みな手のわざ」であり、「高ぶり」であり、「堅固な要塞」である。人がどのようにしてさばきを逃れ、救いを得ようとしても、人間の側から伸ばす手はすべて「肥だめの中で泳ぐ者が伸ばす手」のようなものである。